

「却温神呪」を讀誦する効果

——「仏説却温黄神呪經」訳注——

教学研究委員会編

解 説

臨濟宗の朝課などで唱えられている陀羅尼の一つに「却温神呪」がある。

南無^{ナムフド}仏陀^ト耶^ヤ 南無^{ナムダ}達磨^{ダモ}耶^ヤ 南無^{ナムス}僧伽^{ソウキヤ}耶^ヤ 南無^{ナムジウ}十方^{ジウホウ}諸^{シュ}仏^{フツ} 南無^{ナムシウ}諸^{シュ}菩薩^{ボサツ}摩訶^{マカ}薩^{サツ} 南無^{ナムシウ}諸^{シュ}聖^{セイ}僧^{ソウ} 南無^{ナムシウ}呪^{シュ}師^シ
沙羅^{サラ}伽^カ 沙羅^{サラ}伽^カ 夢多^{ムト}難^{ナン}鬼^キ 阿^ア佉^キ尼^ニ鬼^キ 尼^ニ佉^キ尸^シ鬼^キ 阿^ア佉^キ那^ナ鬼^キ 波^ハ羅^ラ尼^ニ鬼^キ 阿^ア毘^ピ羅^ラ鬼^キ 波^ハ提^{テイ}犂^リ鬼^キ 疾^{シツ}去^コ
疾^{シツ}去^コ 莫^{マク}得^{トク}久^ク住^{ジュ}

という漢文混じりの短い陀羅尼で、仏・法・僧の三宝に帰依するとともに、疫病（＝流行性の伝染病）をもたらずとされる七人の鬼神（＝「七鬼神」）の名を呼び、これらを退散させることを本来の目的とする。

この「却温神呪」を収載し、釈尊によって説かれた由来や効能などについて解説した經典が、今回、訳注の対象として取りあげた『仏説却温黄神呪經』（以下「却温黄神呪經」と略記）である。そこで、訳注本文に入るまえに、この經典について、若干の説明をしておきたい。

『却温黄神呪経』の内容を一言でいうなら、釈尊が賢者阿難に対して疫病封じの対処法を開示した經典である。このうち、釈尊によつて、具体的に読誦するよう指示される陀羅尼や言句を纏めたものが、所謂「却温神呪」ということになる。

これら陀羅尼・言句以外の漢文部分で特に興味深いのは、そこに、『却温黄神呪経』と中国の民間風習との密接な関わりが示唆されていることである。

一例をあげてみよう。詳しくは訳注本文を参照して頂きたいが、釈尊によつて説かれたとされる教示の後半部分に注目されたい。そこには、七鬼神の名前を書き記して五色の絹糸で結びつけ、これを門の上に繫げると、大いに効果があると説かれている。

そもそも、古来、中国では、疫病などの災難悪事は、一般の人々の目には見えない悪鬼が引き起こすものと考えられていた。そこで、これら悪鬼を追い払うためには、悪鬼に自分の正体が見破られたと思ひ込ませることが有効であるとされ、そのため、悪鬼を名指しすることは、疫病予防につながるとされたわけである。加えて、青・赤・白・黒・黄の五色の絹には、こうした災難悪事を祓う力があるとも信じられてきた。

たとえば、隋代の歳時記『玉燭宝典』が引用する後漢末の『風俗通義』には、「夏至・五月五日、五色の絹に、『野鬼遊光』と記す。〔中略〕『遊光』とは厲鬼光（＝疫病をもたらす悪鬼）のことである。その名を知れば、人は疫病に罹らない。（夏至五月五日、五采辟兵、題野鬼遊光。〔中略〕遊光厉鬼光。知其名、令人不病疫温。）」とある。また、隋代を遡る六朝期、梁の頃に成立した『荆楚歳時記』「五月五日」の条には、疫病から身を守るために、五色の絹糸を臂に繫ぐという風習が紹介されている。つまり、『却温黄神呪経』で説か

れる疫病封じの対処法、すなわち、七鬼神の名を呼んだり、五色の絹糸に結びつけた七鬼神の名を門上に掲げたりするという方法は、漢代以来の、こうした風習の一つであつたと考えられよう。こう見てくると、『却温黄神呪経』は、中国の民間風習を相当程度意識しつつ、これに密着したかたちで説かれた經典であつたということになる。

8

この『却温黄神呪経』一巻の原典は、現在、『大日本統藏経』（正統藏経）第三冊に収録されているため比較的簡単に見ることが出来る。しかし、宋版・元版・明版の大藏経、あるいは高麗藏や大正藏には全く収録されていない。また、同じく頻繁に唱えられる「楞嚴呪」「大悲呪」「消災呪」といった陀羅尼が、宋代以降の禅宗や民間において盛んに読誦されていたのに対し、「却温神呪」が中国で読誦されたという形跡はない。となると、『却温黄神呪経』を『大日本統藏経』（以下『統藏経』と略記）に収録するにあたって、刊行元の藏経書院が、どのようなテキストを底本としたかということが問題になるが、これについては、京都大学附属図書館所蔵『藏経書院本目録』の記録から、「和本」の写本であつたことが推測される（藏—16・ミ・1）に「佛說却温神咒經 寫和大（密經軌部ノ内）」とある）。

次に、『却温黄神呪経』の訳者が誰であつたかということであるが、『統藏経』所収本の異本と考えられる『秘密儀軌集』第九所収本には、「大広智不空訳」と記されているという（『仏書解説大辞典』第二巻・p. 250「却温黄神呪経」条）。だが、『仏書解説大辞典』でも既に指摘される通り、一方の『統藏経』所収本は訳者の名を欠いており、また、『大唐貞元統開元釈教録』（*Ching-nang*）などの各種経録に記された不空訳の經典のうち、『却温黄神呪経』の名を確認することはできない。さらにいうなら、平安時代前期の真言宗の僧、

宗叡（八〇九―八八四）が中国から日本に持ち帰った經典リスト『新書写請来法門等目録』のなかに「仏説却温氣神呪經」という記載を確認することができ、そこには「人名無し（無人名）」という割り注がある（T55-1109b）。江戸時代の真言宗の僧、亮汰（りょうたい、一六二二―一六八〇）も、『却温黃神呪經』の注釈書である『却温神呪經鈔』の自序「却温經鈔玄談」のなかで、『新書写請来法門等目録』の記載を根拠に、「『却温黃神呪經』の」異本が不空の訳と云うのは間違いである。（經異本云不空訳者、非也。）と述べている。つまり、訳者は、「不明」とするのが通説なのである。

したがって、『却温黃神呪經』は、その訳出時期や訳者を含め、來歴については全く定かでない經典ということになる。既に述べた通り、その内容には、中国の歲時記などに見られる民間風習が色濃く反映されている。このことから、『却温黃神呪經』は、中国撰述の疑經であつたとするのが妥当であろう。

§

先の宗叡『新書写請来法門等目録』に「仏説却温氣神呪經 無人名、説滅火温氣病 二紙」（T55-1109b）とあることから、『却温黃神呪經』が、既に唐代の時点で中国に存在した經典であつたことは確かである。しかし、『却温黃神呪經』と内容の類似した『仏説灌頂經』（『大灌頂神呪經』）や『仏説呪時氣病經』が、未版・元版・明版などの各種大藏經に収録され、中国ではその存在が比較的知られた經典であつたのに対し、『却温黃神呪經』は、むしろ、日本でこそ注目された經典であつた。

宗叡が中国から持ち帰つて以来、『却温黃神呪經』は、密教系の經典として、日本真言宗に伝わつていったものと思われる。また、実際、そこに説かれる疫病封じの方法が一般的にも行われていたという事実が、たとえば、日蓮『立正安國論』（問答一）の記載からもうかがえる。だが、この經典が特に注目されるよう

になるのは、恐らく、江戸時代に入ってからのものであり、そこには、先に触れた亮汰が深く関わっていた。亮汰に多年付き随ったとされる隆慶（一六四七—一七一七）によって著述された『豊山伝通記』、その巻中末の「第十一世亮汰僧正伝」（『大日本仏教全書』一〇六所収）には、「延宝二年（一六七四）の夏、洛西で疫病が大流行した。師（亮汰）は印刷工に命じて『卻温神呪経』を印刷させ、「これを」広く村々に配布し、「却温黄神呪」経を竹筒に収めて門戸に掛けさせた。「そのおかげで」人々は皆な疫病から免れることができた。（延宝甲寅夏、洛西大疫。師命剖厥氏、印卻温神呪経、広与里邑、收経於竹筒、以掛門戸。人僉免疫氣。）とあり、つづけて、仁和寺の学匠顕証（一五九七—一六七八）の勧めで、亮汰が『却温神呪経鈔』を著したということが記されている（p. 329）。一方、亮汰自身は、顕証が万民のために『却温黄神呪経』を上梓して、これを広く流通させ、近年の疫病に効き目があったとしたうえで、その靈験に感銘を受けたことが『却温神呪経鈔』撰述の動機になったと記す（『却温経鈔玄談』）。『却温黄神呪経』が、果たして、亮汰によって上梓されたものなのか、あるいは、顕証によって上梓されたものなのかは判然としないが、いずれにせよ、延宝二年の疫病発生に前後して『却温黄神呪経』が上梓され、つづいて、亮汰によって『却温神呪経鈔』が著述された結果、この經典の存在が広く世に知られるようになったのである。

§

それでは、『却温黄神呪経』の、主として陀羅尼部分を取り出した「却温神呪」は、どのような経緯を経て禅宗で読誦されるようになったのであろうか。実は、この肝心な点に関しては、いまのところ一切明らかになっていない。たとえば、無著道忠『禅林象器箋』には、「楞嚴呪」「大悲呪」「消災呪」「仏頂尊勝陀羅尼」などの名が見え、これらの陀羅尼が禅宗で読誦されていたことは確認できるものの、「却温神呪」につ

いては記録されていない。また、伊藤古鑑氏の『禪宗聖典講義』（森江書店・一九三五、臨済宗青年僧の会・一九八五復刻改訂）も、「宗叡僧正の『御請來録』には、仏説却温神呪経一卷 無人名、説滅大温気病と云ふて居る」(p. 284-5)と指摘し、末釈として、亮汰の『科註却温神呪経鈔』一卷を引くが、禪宗との関係については触れていない。『仏書解説大辞典』には、「古來禪林法社の間に於て「却温神呪」として広く依用せられ、雖僧尚ほ之れを目誦口誦するを例とする。修行者をして温気疫毒を除却して苦患を離れ、安穩を得せしめんが為めの念誦であろう。」(p. 250) という記載が見られるが、その資料的根拠も定かでない。つまり、禪宗において、「却温神呪」が、一体、いつ頃、どのようにして唱えられるようになったかという問題に関しては、全く分からないというのが現状なのである。この点については、今後検討されるべき課題であるといえよう。

最後に、「却温神呪」および『却温黄神呪経』を取りあげた解説・訳注の存在について触れておくと、管見の限りでは、ほぼ皆無に等しい。右の『禪宗聖典講義』のほか、わずかに、木村俊彦・竹中智泰共著『禪宗の陀羅尼』（大東出版社・一九九八）で「却温神呪」が取りあげられているが、残念ながら詳細な説明は付されていない。今回、教学研究委員会で『却温黄神呪経』を訳注の対象に選んだのは、一つに、こうした現状を踏まえてのことであった。

確かに、現時点では、「却温神呪」と禪宗との関係如何については明らかでない。とはいえ、現在の禪宗において、それが重要な陀羅尼となっていることは紛れもない事実である。これを平素読誦する者としては、まずは、「却温神呪」という陀羅尼が、本来どのような目的で唱えられていた陀羅尼で、どのような經典に収載されていたかということ把握しておく必要があるだろう。となると、『却温黄神呪経』の理解が不可欠になる。本訳注が、そうした理解の一助となり、かつまた、「却温神呪」と禪宗との関わりを考えるうえで、きつかけとなれば幸いである。

(本多道隆)

《凡例》

○本訳注は、「仏説却温黄神呪経」を対象とし、【原文】【校注】【訓読】【現代語訳】【注】の順で掲載している。

○底本には「大日本統藏経」第三冊所収本を用いた。該当箇所は、Z3-388d-1-389aに相当する。字句の異同については、延宝六年（一六七八）前川茂右衛門尉刊の和刻本、亮汰「却温経鈔玄談」（九州大学松濤文庫所蔵本）によって校勘を行ない、訳注に際しても、同書を参考にした。

○原文は当用漢字を用い、訓読文は現代仮名遣いとした。

○現代語訳は直訳を心掛けたが、必要と思われる場合は「」で適宜ことばを補った。

○注に引用した書籍については、その初出の箇所を明記した。また大正大藏経・大日本統藏経（「正統藏」）についてはそれぞれ「T」「Z」の略号を用いた。その他の略号は次の通り。

【中村】＝中村元「仏教語大辞典」（東京書籍）

【望月】＝望月信亨「望月仏教大辞典」（世界聖典刊行協会）

【岩波】＝中村元等編「岩波仏教辞典」初版（岩波書店）

【総合】＝総合仏教大辞典編集委員会「総合仏教大辞典」（法蔵館）

○今回、訳注原稿を担当したのは、廣田宗玄と徳重寛道であり、それぞれの担当箇所は次の通り。

廣田担当＝原文 Z3-388d-1-1-17（「開如是」）～「波提黎鬼」

徳重担当＝原文 Z3-389a-1-18-34（「仏言」）～「作礼奉行」

また、「解説」は本多道隆が作成した。

原稿の読み合わせは教学研究委員全員（朝山一玄・玄侑宗久・徳重寛道・並木優記・野口善敬・廣田宗玄・本多道隆・矢多弘範「五七首願」）で行ない、全体の編集校閲については野口と本多が行なった。

『仏説却温黄神呪經』 訳注本文

【原文】

仏説却温黄神呪經

聞如是。一時、仏遊王舍城竹林精舍、与四部弟子大衆俱会、為説經法。爾時、維耶離国、属疫氣猛盛、赫赫猶如熾火。死亡無數、無所歸趣、無方救療。於是、阿難長跪合掌、白仏言、彼維耶離国、遭温氣疫毒。唯願世尊、説諸聖術、却彼毒氣、令得安穩、離衆苦患。仏告賢者阿難、汝当聽受之。有七鬼神、常吐毒氣、以害万姓。若人得毒、頭痛寒熱、百節欲解、苦痛難言、人有知其名字者、毒不害人。是故吾今為汝説之。阿難言、願欲聞之。仏言、若四輩弟子、欲称鬼神名安之時、当言

南無仏陀耶 南無達磨耶 南無僧伽耶 南無十方諸仏 南無諸菩薩摩訶薩 南無諸聖僧 南無呪師 某甲今我弟子所説神呪、即從其願。如是神名、我今当説

沙羅佉

三説沙羅佉已、便説呪曰、

夢多難鬼 阿佉尼鬼 尼佉尸鬼 阿佉那鬼 波羅尼鬼 阿毗羅鬼 波提黎鬼。

仏言、是七鬼神呪。名字如是。若人熱病時、当呼七鬼神名字、言

疾去疾去莫得久住。

我弟子身、令毒消滅、病速除愈。我弟子、今帰依三宝、焼香礼敬、行是諸仏所説神呪。若有鬼神、不随諸仏

教者、頭破作七分、如阿梨樹枝。若人得病、一日二日三日、乃至七日、熱病煩悶、先呪神水、以与病者飲之、当三七遍誦此呪經。病毒五温之病、並皆消滅。若亦立門、書著氣病者、当額書七鬼神名字。復取五色繚線、各各結其名字、繫著門上、大吉祥也。若能勤誦此經、專心受持、齋戒不喫薰辛、誦此七鬼神名字、温鬼永斷、不過門戶。自進至患家、鬼見皆走、一身永不染天行。若能專心勸人書写受持誦此經、消殃却害^(四)。若人不能誦、得竹筒盛、安門戶上、温鬼不敢過門、亦得延年養壽、大吉祥也。

阿難叉手白仏言、当何名此經、云何奉持。仏言、此經名、為却温神呪。
仏説如是。天龍鬼神、一切大衆、聞呪歡喜、作礼奉行。

却温神呪經

【校注】

- (一) 底本には「大日本統藏經」(「正統藏經」)所収本(Z3-388d-389a)を用いた。
- (二) 維ニ底本は「阿」に作るが、亮汰撰「却温神呪經鈔」(「阿」)に拠つて改めた。
- (三) 鬼ニ底本は「呪」に作るが、亮汰撰「却温神呪經鈔」(「鬼」)に拠つて改めた。
- (四) 亮汰撰「却温神呪經鈔」には、この下に「無事不害」の四字有り。

【訓 読】

仏説却温黄神呪經

是くの如く聞けり。一時、仏、王舎城の竹林精舎に遊び、四部の弟子大衆と俱に会して、為に經法を説く。爾の時、維耶離國、屬たま疫氣猛盛にして、赫赫たること猶お熾火の如し。死亡するもの無数にして、帰趣

する所無く、方に救療すること無し。是こに於いて、阿難^⑥、長跪合掌^⑦し、仏に白して言わく、「彼の維耶離國、温気疫毒^⑧に遭う。唯だ願わくは、世尊よ、諸もろの聖術を説きて、彼の毒氣を却^⑨け、安穩を得て衆^⑩の苦患より離れしめよ」と。仏、賢者阿難に告ぐ、「汝、当に之を聴受すべし。七鬼神^⑪有り、常に毒氣を吐きて、以て万姓^⑫を害す。若し人、毒を得れば、頭痛寒熱し、百節^⑬解せんと欲して、苦痛なること言い難きも、人、其の名字を知ること有らば、毒、人を害せざらん。是の故に吾れ今ま汝が為に之を説かん」と。阿難言わく、「願わくは之を聞かんと欲す」と。仏言わく、「若し四輩の弟子、鬼神の名を称^⑭えて之を安んぜんと欲する時、当に

南無仏陀耶 南無達磨耶 南無僧伽耶 南無十方諸仏 南無諸菩薩摩訶薩 南無諸聖僧 南無呪師
某甲^⑮

と言ふべし。今ま我が弟子の説く所の神呪は、即ち其の願に従らん。是くの如きの神名、我れ今ま当に

沙羅法^⑯

と説くべし」と。三たび「沙羅法」と説き已^⑰わり、便ち呪を説きて曰わく、

夢多難鬼 阿佉尼鬼 尼佉尸鬼 阿佉那鬼 波羅尼鬼 阿毘羅鬼 波提鞞鬼^⑱

と。仏言わく、「是れ七鬼神の呪なり。名字も是くの如し。若し人、熱病の時、当に七鬼神の名字を呼び、

疾去 疾去 莫得久住^⑲

と言ふべし。我が弟子の身、毒をして消滅し、病をして速やかに除愈せしめん。我が弟子、今ま三宝に帰依し、焼香礼敬して、是の諸仏の説く所の神呪を行ぜよ。若し鬼神、諸仏の教えに随わざること有らば、頭破^⑳れて七分と作ること、阿梨樹の枝の如くならん。若し人、病を得、一日・二日・三日、乃至七日、熱病煩悶すれば、先ず神水に呪^㉑し、以て病者に与えて之を飲ましめ、当に三七遍、此の呪経を誦^㉒うべし。病毒・

五温の病は、並皆て消滅せん。若し亦た門を立てて氣病を書著けば、当に七鬼神の名字を額書すべし。復た五色の縷線を取りて各各其の名字に結び、門の上に繫著げば、大いに吉祥ならん。若し能く勤めて此の経を誦え、専心に受持し、齋戒して薰辛を喫せず、此の七鬼神の名字を誦うれば、温鬼永く断えて、門戸を過ぎざらん。自ら進みて患家に至らば、鬼見て皆な走り、一身、永く天行に染されざらん。若し能く専心に人に勤めて此の経を書写し受持し誦せしめば、殃を消し害を却けん。若し人、誦うること能わざるも、竹筒に盛り、門戸の上に安んずるを得れば、温鬼、敢えて門を過ぎず、亦た延年養寿を得て、大いに吉祥ならん」と。

阿難、叉手して仏に白して言わく、「当た何と此の経を名づけ、云何が奉持せんや」と。仏言わく、「此の経の名、『却温神呪』と為さん」と。

仏の説くことは是くの如し。天龍鬼神、一切の大衆、呪を聞きて歎喜し、札を作して奉行す。

却温神呪経

【現代語訳】

温黄を却けるための神呪を説く經典

このように聞いた。あるとき、聖尊 仏は王舎城の竹林精舎に出かけ、「比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の」四種の弟子たちを集めて、「彼らの」ために経法を説かれた。その時、ゴブアイシャリー 維耶離国では、ちょうど疫病が猛威を振るっており、その凄まじさは、まるで燃え盛る炎のようであった。亡くなる人も数知れず、逃げ場所は無く、治療する方法もなかった。そこで、阿難は、膝について合掌し、仏にこう申し上げた、「あのゴブアイシャリー 維耶離国では、

温氣疫毒（＝生命の危険性を伴う発熱性の伝染病）が流行しております。どうか、世尊よ、さまざまな聖術を説いて、あの毒氣を撃退し、「人々に」安穩を得させ、多くの苦痛から逃れさせて下さい」と。仏は、賢者である阿難に告げた、「汝、よく聴きなさい。七人の鬼神がいて、常に毒氣を吐いて、多くの人々を苦しめているのだ。もし人が「鬼神の吐く」毒にあたると、頭痛がして寒氣と高熱を伴い、「身体の」節々がバラバラになりそうになって、言葉に出来ない程の苦痛であるが、人が鬼神の名字を知ったなら、毒は人を害することはないだろう。だから、私は今、汝のために鬼神の名字を教えよう」と。阿難が言った、「どうか、その名前をお聞かせ下さい」と。仏が言った、「もし「比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の」四種の弟子たちが、鬼神の名前を呼んで、鬼神を鎮めようとする時には「その前にます」、

南無仏陀耶 南無達磨耶 南無僧伽耶 南無十方諸仏 南無諸菩薩摩訶薩 南無諸聖僧 南無呪師
某甲（仏に帰依します、法に帰依します、僧に帰依します。十方の諸もろの仏に帰依します、諸もろの菩薩・摩訶薩に帰依します、諸もろの聖僧に帰依します、呪師の誰それに帰依します。）

と言わねばならない。今、私の弟子たちが唱えることになる神呪は、その「仏・法・僧などへ帰依する」願いによ、「つて効き目がある」のである。「そして」このような鬼神の名について、私は今、まさに

沙羅法（追い払いたまえ。）

と説かねばならない」と。三回「沙羅法」と唱え終わると、「仏は、次のような」呪を説いて言った、

夢多難鬼 阿佉尼鬼 尼佉尸鬼 阿佉那鬼 波羅尼鬼 阿毘羅鬼 波提黎鬼

と。「つづけて、」仏は言われた、「これらが七鬼神の呪である。「それらの鬼の」名字もこの通りである。もし人が、熱病にかかったときには、必ず七鬼神の名字を叫んで、

疾去 疾去 莫得久住（速やかに立ち去れ！ 速やかに立ち去れ！ 長らく「ここに」留まるな！）

と言いなさい。「そうすれば」私の弟子たちの身体からは、毒が消滅し、病も速やかに治癒することであろう。我が弟子たちよ、今「仏・法・僧の」三宝に帰依し、香を焼き、心から礼拝して、この諸仏が説いた神呪を唱えなさい。もし鬼神が諸仏の教えに従わないなら、頭が割れて七つに分裂し、阿梨樹の枝「の先に咲く花」のようになってしまうことだろう。もし人が病になって一日・二日・三日ないし七日「間に涉って」、熱病に苦しみもがくようなら、まず神水清らかな水に呪まじないいして、それを病人に与えて飲ませなさい。「そして」必ず三七遍三四「繰り返して」呪経じもんを唱えれば、病毒や五「瘟神のもたらす」疫病は全て消滅するであろう。もし「紙や木材などを使った簡易の」門を立てて疫病「の名前」を書き記す場合には、必ず七鬼神の名字なまえを額がくに書きなさい。さらに「青・赤・白・黒・黄の」五色の絹糸を取って、「これらの五色を」鬼神の名字なまえ「を記した額」にそれぞれ結びつけて門の上に繋つなげるならば、大いにめでたい効果があるだろう。もしこの経をしつかりと誦となえて、一途に受持まかし、齋戒さいがいして薫くん（＝匂いの強い野菜）や辛しん（＝辛味のある野菜）を口にせず、この七鬼神の名字なまえを唱えることが出来たなら、疫病をもたらす鬼を永遠に断ち切り、「鬼は、住居の」門戸から侵入することが出来ないだろう。自分から進んで疫病患者のいる家に入ったなら、「疫病をもたらした」鬼は「それを」見て皆な「この家から」走り去り、その身は永く疫病に染けがされることはないだろう。もし一途に人に勧めて、この経を書写し、受持まかし、読誦よみさせるなら、殃わざわいを消し害悪を退けるであろう。もし唱えることが出来なくても、竹筒に「呪経じゆきやう」を詰めて門戸に安置するなら、疫病をもたらす鬼は侵入しようとせず、延年ねんねん養寿ようじゆして、大いにめでたい効果があるだろう」と。

阿難は合掌して仏にこう申し上げた、「一体、この経を何と名づけ、どのように奉持たもてばよいのでしょうか」と。仏は言われた、「この経の名を『却温神呪』としよう」と。

仏がお説きになったことは、このようであった。天「王」・龍「王」・鬼神たちと、あらゆる大衆ひとびとは「この

却温神」呪を聞いて歡喜し、礼拝して「仏の教えを」謹んで実行した。

却温神呪経

註

(1) 温黄＝生命に関わる流行性の伝染病。「温」とは「瘟病」

「瘟疫」のことであるが、中国の伝統医学では、「温」と「瘟」とは常に混同して用いられる。ともに熱病、あるいは急性伝染病の総称である。「黄」とは、身体が黄色に変色することを意味し、黄痘の症状に相当する。清の呉謙

(一六八九―一七五九)らによって収集整理された医学百科全書に「医宗金鑑」があり、卷四二「雜病心法要訣」

「痘証門」には、注として、後漢張仲景「傷寒論」からの引用が見られる。その一文に、「天行疫癘は黄痘を發するため、名づけて「瘟黄」と言い、死者〔の出る数〕が最も酷い。(天行疫癘發黄、名曰瘟黄、死人最暴也。)」とある

〔痘病死証〕条)。なお、現代中国医学(＝中医学)では、「劇症肝炎」を指して「瘟(温)黄」という。

(2) 王舍城＝(梵)ラーシヤグリハ [Rājagṛha]、(巴)

ラージャガハ [Rājagaha] の訳。古代インドの摩揭陀 [マガダ・Magadha] 国の首都。現在のビハール州パトナの南方ラーシギル [Rājīr] にあたる。クシヤグラプラ [Kusagrāpura] 矩奢揭羅補羅と音写し、上茅宮城と訳す。]という山に囲まれた旧城があったが焼失したので、

ビンビサーラ [Bimbisāra] 頻婆娑羅] 王の時、一説にはその子アジャータシャトル [Ajātasattu] 阿闍世] 王の時に、山の北の平地に建設したという。このため王舍新城ともよぶ。(総合] p. 141b-c 参照)

(3) 竹林精舎＝迦蘭陀竹園・羯蘭鐸迦竹園・迦陵竹園・鵝封竹園ともいう。旧王舍城の北門近くにある竹林。そこに建てられた僧院のこと。寄進者は迦蘭陀長者とも頻婆娑羅王とも伝える。(総合] p. 206c)

(4) 四部弟子大衆＝四衆。また四輩、四部衆、四部の弟子ともいう。仏教教団を構成する四種の人。①比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷。②比丘・比丘尼・沙弥・沙弥尼。(総合] p. 537b)

(5) 維耶離國＝(梵)ヴァイシャリー [Vaiśālī]、(巴)ヴェーサーリー [Vesālī] の音写。吠舍釐・毘舍離とも。十六大国の一つであるヴァッジ [Vajji] 跋耆] 國を構成する部族の一つ、リッチャヴィ [Licchavi] 離車] 族の都。ガンジス河の支流ガンゲキ河の東岸にあるベーサー [Besā] がその旧趾といわれる。仏陀は成道後五年の雨期をこの町の郊外のマハーヴァナ [Mahāvāna] 大林] で過ごした。仏陀は最後の雨期もこの近くで過ごし、

その時、遊女アンババリー [Ambapali・菴婆羅婆利] が寄進した菴沒羅園はこの郊外にある。〔総合〕 p. 1252b 取意)

(6) 阿難 (= 梵) (巴) アーナンド [Ananda・阿難陀]。阿難は略。仏十大弟子の一人。迦毘羅衛 (カピラヴァットゥ・Kapilavastu) 城主、甘露飯王の子とされるが、白飯王あるいは斛飯王の子とする經典もある。何れにしても仏陀の従弟にあたる。出家後、仏陀の侍者として側近に仕え、教説をよく記憶していたので多聞第一といわれた。〔総合〕 p. 17b 取意)

(7) 長跪合掌 = 「長跪」は両膝を地につける礼法。「合掌」は十指を合わせ、前に差し出し、首を屈する礼法。〔中村〕 p. 750a)

(8) 温気疫毒 = 亮汰撰「却温神呪経鈔」では「温気疫毒」を注釈して、「温気とは、義に約すなり。疫毒とは名に約すなり。字書にては、毒は痛なり。害なり。苦なり。(温気者、約義也。疫毒者、約名也。字書、毒痛也。害也。苦也。)(8a)と説明する。しかし、厳密には「温気」は「温(瘟)病(発熱性の疫病)」、「疫毒」は疫病を引き起こす直接の原因のことで、「病原体(細菌・ウイルス)」、あるいはその「毒素」を意味すると思われる。ただし、後に「五温之病」とあって、「却温神呪経鈔」が、五力士(= 五鬼・五瘟神)によって引き起こされる疫病のことでありと注するように(注18「五温之病」参照)、そうした

現代的病理についての知識は未発達であった。

(9) 七鬼神 = 七人の鬼神の意。「却温神呪経鈔」によれば、「古徳の伝に云わく、是れ七母天の異名なり、と。(古徳伝云、是七母天之異名也。)(9a)とある。「七母天」とは、焰摩天 (= 閻魔)、又は大黒天の眷属たる七人の女神をいう。又は七摩怛里天、七母女天、七姉妹、七母などとも名づく(「望月」 p. 1935a)。) については、後にみえる「夢多難鬼、阿佉尼鬼、尼佉尸鬼、阿佉那鬼、波羅尼鬼、阿毘羅鬼、波提犁鬼」のこと。なお、「中村」(p. 582c)が「疫病を対治する七人の鬼神」と解説するのは誤りであろう。

(10) 万姓 = 多くの人民。

(11) 百節 = 身体中のふしおし。

(12) 南無仏陀耶 = 南無呪師 某甲 = 「南無」は、[nama] (屈するの意)の音写。帰命・帰敬・帰礼・敬礼・信従などと漢訳する。まごころをこめて仏や三宝に帰順して信をささげることという(「中村」 p. 1029d)。「仏陀耶」・「達磨耶」・「僧伽耶」は、三宝 (= 仏・法・僧)のこと。全体の意味は、「仏に帰依します、法に帰依します、僧に帰依します。十方の諸もろの仏に帰依します、諸もろの菩薩・摩訶薩に帰依します、諸もろの聖僧に帰依します、呪師の誰それに帰依します」。

(13) 今我弟子所説神呪 = 「却温神呪経鈔」によれば、「弟子とは、後の持者に約すなり。(弟子者、約後持者也)」

(12b)とある。これから教示する神呪を後に誦持する者の意であろう。

(14) 沙羅伽^{II}鬼神の名前を言う前に誦える呪文。「却温神呪經鈔」に、「遣」の義に取る(13b)とあるのに拠って、「追ひ払う」という意味に解した。

(15) 夢多難鬼^{III}波提犁鬼^{II}「夢多難鬼」は、一般的な經本では「莫多南鬼」に作る。木村俊彦・竹中智泰共著「禪宗の陀羅尼」(p.102)によれば、これらは「般若理趣經」に出でくる女夜叉で、大黒天の眷属・侍女であり、病氣をまき散らす細菌やウイルスを表現したと思えばよい、とある。内容的に近似する「仏說灌頂經」巻九では、五方龍王と、それぞれに伴う小龍の名を神呪としてあげている。

(T21-521b-522c)

(16) 頭破作七分、如阿梨樹枝^{II}「阿梨」は梵語 [arjaka] の音訳。インドにあったといわれる木の名。この枝(花のことと推定される)は落ちると、七つに分かれるとされる。

このこと類似的表現は、『妙法蓮華經』「陀羅尼品第二六」など、数多くの經典に見える。「陀羅尼品」(T9-59b)では、藥王菩薩・勇施菩薩・毘沙門天・持国天・十羅刹女等が、「法華經」を讀誦し、その教えをたもち、あるいは他者のために説法する者があれば、その者を助け守ることを釈尊に誓っているが、もし「法華經」の説法者を悩ませ心を乱すものがあるならば十羅刹女が、「頭破作七分」つまりそのものの頭をバラバラに破壊するという罰を与える、とい

うものである(「岩波」等参照)。

(17) 神水^{II}神聖な水。神域に湧き出て、泉となりあるいは川となつて流れる清らかな水。

(18) 五瘟之病^{II}五瘟神たる五方の力士によつてもたらされる疫病を指す。この五力士は、天では「五鬼」といい、地では「五瘟使者」という。亮汰の「却温神呪經鈔」にも、「搜神記」に曰わく^{II}として、このことについての解説が見られる(17b-18a)。それによると、隋の文帝の開皇十一年(五九一)六月に、青・紅・白・黒・黄の服を身に纏つた五力士が上空に現れたとされ、文帝が太史張居仁に、その現象について質問したとある。これに対し、張居仁は、五力士が、天上にあつては五人の鬼となり、地上にあつては五種の瘟(^{II}瘟疫、悪性かつ流行性の伝染病)になるといふこと、そして、季節ごとに、それぞれ、春瘟が張元伯、夏瘟が劉元達、秋瘟が趙公明、冬瘟が鍾仕貴、総管の中瘟が史文業と名づけられるといふこと、さらに、これら五力士が現れたときには民に注意を促す必要があるといふことを奏した、とされる。ここに所謂「搜神記」とは、元代の道教系文獻「搜神広記」のことかと思われるが、未見である。明代永樂年間(一四〇三—一四二四)のうちに成立した「三教搜神大全」巻四に、この説話が見える。

(19) 若亦立門、書者氣病者^{II}「立門」の意味は不明。道教儀式では、紙や木材を使って簡易の門を立てることがあるようである。ここでは、これに類似する儀式、もしくは風習

と考えて解釈しておく。

- (20) 取五色纁線、各各結其名字、繫著門上、大吉祥也。五色の「纁線」、すなわち青・赤・白・黒・黄の絹糸(Ⅱ五綵糸)には、漢代の頃から、災難悪事を祓う力があるとされていたらしい。北宋期の「太平御覽」卷二三「時序部八・夏至」には、後漢の永建年間(一二六一—一三三)に疫病が大流行した際、これが厲鬼(疫鬼は擬人化され、字は「野重遊光」といわれた)の仕業だという噂が流れ、その後も毎年たびたび疫病が流行つたため、戦々恐々とした人々は、五色の絹に疫鬼の名前である「野重遊光」と書くことで疫難から免れることを願うようになったと記されている。また、今の人々が、その年に新たに織られた絹織物を身にまとつたのち、その二寸ばかりを戸上につなぐのは、こうした理由からであるとも記されている(中村喬著「中國歳時史の研究」朋友書店・一九九三、p. 66—)参照)。なお、日本で現在行われている「五色の吹き流し」の起源もここにあって考えられている(守屋美都雄ほか「荆楚歳時記」平凡社東洋文庫・一九七八、p. 156「五綵」注参照)。いずれにしても、インドにはない、中国独特の民間風習が色濃く反映されている。
- (21) 齋戒Ⅱ八齋戒の略。八齋戒は「八戒齋」「潔齋」「八閏齋」ともいい、単に「齋」ともいう。くわしくは「八支近住齋戒」。齋は、つつしむ意で布薩の訳。六齋日に守る八つの戒。布薩の日に寺に出かけて、一昼夜守る在家の戒、

在家の五戒に衣食住の具体的な節制、すなわち装身具をつけず、歌舞を見ないこと、ベッドに寝ないこと、昼をすぎずして食事をしないこと、を加えて八条としたもので、出家生活に一步近づく意義をもつ。原始仏教でもこれを取り入れている。中国では「孟子」「離婁章句下」に「悪人有り」と雖も、齋戒沐浴すれば、則ち以て上帝を祀るべし。(雖有悪人、齋戒沐浴、則可以祀上帝。)とあるように、天帝を祀るときに身心を清め、行いを慎むことを意味した。インド伝来の仏教行事を、中国の伝統的の神事の用語で置換した用例の一つであるが、単なる流用にとどまらず、その概念やしきたりにも中国的な変容が見られる。たとえば行事そのものが簡略化される一方、神仏への祈願の傾向を強めているなどはその一例である。(以上「岩波」「齋戒」「八齋戒」項の要約)

- (22) 薑辛Ⅱ葱(ねぎ)、韭(にら)、蒟(んにく)などのように一種の臭気のある野菜と、生薑(しょうが)、芥子菜などのように辛味のある野菜。

(23) 患者Ⅱ患者のいる家。

(24) 天行Ⅱ時節によつて流行する病氣。はやり病。時行病。

- (25) 叉手Ⅱ合掌すること。また、両手を胸の前で重ね合わせる。インドの叉手は合掌して中指を交差させる(中村「p. 600a参照」)。